



# ジンバブエの風

発行者のジンバブエ野球会は、1998年4月にジンバブエ初の野球場「ハラレドリームパーク」を作ったジンバブエFOD委員会を引き継ぎ、アフリカの野球振興と野球交流をゆったりと支援する会です。

東京オリンピックに向けてのアフリカ1次予選が2019年3月から4地区に分かれて始まり、ジンバブエの属する南ゾーンは、4月23日から26日まで、南アのヨハネスブルグで開催されます。この数年で最大の目標としてきた大会です。取り敢えず選手達には1次予選を心置きなく戦ってほしいと思っています。  
(予選方式は、事務局だよりをご覧ください)

## 21年ぶりのジンバブエ

おかやま山陽高校野球部監督

元青年海外協力隊ジンバブエ野球隊員 堤 尚彦

21年ぶりのジンバブエ。行くと具体的に決めると、車のラジオからコレラで死者が20名以上出たと流れてきた。12月5日に出発するために期末考査に採点、成績表付けなど、いつもの4倍速で(雑に?)コンプリート。手荷物は、わずかに抑え、90%はゼット株式会社スポンサーして下さった道具を詰め込む。カバンがなく、倉庫から引きずり出した青紫色の大きなスポーツバック。21年前に、巡回指導で、グローブを15個、ボールを5球、ベースなどを入れて運んで担いで歩き回った代物、もちろん1999年ガーナでも活躍、置いて来ようとしたが帰りのカバンがなく一緒に帰国。これも何かの縁、今度こそジンバブエに戻って置いてこようと思った。スマホの仕組みが良く分からず、ラインならWiFiがあれば無料だと言う妻と息子に小馬鹿にされ、頑なに拒み続けていたLINEを開始。ドタバタと高速バスで関西国際空港へ。急遽、1週間遅れで息子も道具を運ぶためにジンバブエ行が決まった。海外一人旅の修行と思っていたが、香港の空港でターミナルが500以上あるのに危機感(親バカ?)を抱き、要所要所を写メで撮り、ラインで息子へ。家族のグループとやらを作られ、そっちにも送信。

香港からは空席が多く、真横になって睡眠。数時間たち、南アフリカ近辺になり窓のブラインドを開けてみると、青紫色の朝焼けが・・・映画の「遠い夜明け」で見たような、23年前に見た美しい景色。南アフリカにつくと、なぜか荷物を一旦外に出され再入国しろと言われ、再入国で戸惑っていると、制服を着たポーターが優しく導いてくれた。と思ったら、チップ迫られ、なるほどと笑顔で1ドルを渡すと、クリスマスだからと駄々をこねられ10ドル渡してしまう。これじゃ、典型的な日本人観光客だと思いつつ・・・。そこから、徐々にアフリカの空気に馴染んできて、テレビ東京の岡田さんと合流。

ブラワヨに着くと、久しぶりと思いつつ、こんな空港だったかなあと記憶を辿る。(実際、違う場所にできたもの)入国で、野球道具が引っ掛かり、3時間。途中、外で待機していたモーリスまで中に入ってきての交渉。何とか空港を出ると、でかい黒人が!シェパードだっ

た。隣には日本人らしき人物。ブラウヨの野球隊員 谷山君がいた。その隣にいた黒人が握手を求めてきたので、カウンターパートか野球選手だと思い「初めまして！」という、「初めてではありません、私が8歳の頃に野球を教えてくれたのがあなたです。お久しぶりです」と言われ、感激。1週間に25校巡回していたので、全員は覚えていませんので、申し訳ないと思っています。「あれだけの学校を教えてられたのだから当たり前です。でも私は、あなたが野球をしてくれたから今も携わっています。」と言ってくれたのがワシントン。シェパードだって、低学年だったので覚えていませんでしたから。モーリス会長の車（なんとベンツ！）で、以前住んでいたアパートなど思い出巡り。しかし、街はイメージの10倍汚く、ゴミだらけ。経済不況の影響で公共サービスが低下しているとのこと。谷山隊員が、シクルマニ高校で野球やっているといますというので行ってみると、黒人居住区の中で、赤茶けた石だらけのグラウンド、真っ青な空の下、裸足でボロボロのボールを追いかける、20年以上前に見ていた景色が目に入ってきました。懐かしくて、込み上げてきました。

翌日には、ハラレに移動。ドリームカップで選手を選考してくれというので、会場に行くと、禿げて太ったオッサン5人ぐらいが近寄ってきた。まずは、選手の心を掴もうと、明るい挨拶・元気・ちょっとした下ネタと思っていると、どいつもこいつも懐かしい、懐かしいと最上級の握手と挨拶をしてくれた。誰かなと思っていると、ワシントンやシェパード同様に、小学校時代の教え子らしい。学校名や有名選手の名前などを出して「そうそう！」などと盛り上がる。一人のビジネスマン風の男は、「私がTボールの大会で負けて泣きじゃくっている時に、フロズン（アイスキャンディーみたいな物）をくれて、慰めてくれたのがあなたです！」と半泣きで言っていました。何か、20年前に蒔いた種が、経済不況などにも負けずに育っていたのかと思うと嬉しくて堪りませんでした。しかも、驚いたのは、大会の準備・運営に協力隊員の谷山君は関与しておらず、自分たちの手で、グラウンドの草を芝刈り機で刈り、ネットを張り、アップをし、審判をし、全て実行していました。残念ながら、2日目は雨のため途中で中止になりましたが、何でもかんでも協力隊員がやっていた20年前とは遥かに違い、ジンバブエ人による野球大会でした。（試合のレベルは別にして・・・） あらかじめ、アメリカ達が候補に選んでいた選手リストも頂いていましたが、先入観が入るのが嫌だったので、自分の目で選び、雨の車の中でアメリカゴのリストと照合して見ると、ほぼ同じ内容で一安心。28名を発表して、ブラウヨへ合宿のため移動。

合宿が始まる前日には、息子もチビッ子一人旅を乗り越え合流。合宿初日は、選手の心を掴むために、100%上手くなったことを実感させなくてはいけないので緊張。相手も、こちらを品定め。険しい顔で「なぜ野球をやっているのか？」と問うと、「自己実現のため・・・」「○▽□・・・」など真面目な答えばかり、そこでNO!と絶叫！ 緊張した面持ちの選手たちに私は真剣な顔で「答えは、男はバットと2つのボールを持っているからだ！」とさらにシャウト！ 2秒間の静寂の後、割れんばかりの拍手と口笛の嵐。掴みは成功。あとは山陽高校が通常している《上手くなるドリル》を守・投・走・打ごとに、伝授、残念ながら《強くなるためのドリル》は、時間なくカット。消化が悪いジンバブエ選手にあわせて、メニューの量を調整。今回助かったのは、谷山隊員と息子が、見本を見せながらできたこと。さすがに47歳で朝から晩まで一緒にはできないので、心底助かった。あとは、昔、村井さんから教わった“負ける4つの原因”についてレクチャー。これは、甲子園にもいけた山陽野球の考え方のベースになるもの。ただ、時間がなく対処法の3段階のステップ1までしか伝授できなかったのが残念。また今度、得意のラインで、谷山隊員にステップ2と3を伝えておきます。あとは、できるかは分かりませんが、大阪桐蔭を倒すための山陽スペシャルのIからIVも紹介。時間のある中、やれることはやってきました。

合宿を通じて感じたのは、野球のレベルは、正直に言うと岡山でも県大会ベスト16いけ

るかどうか。1年ぐらい時間かけて、よい環境で練習すれば甲子園レベルにはなると思います。ただ、ドリームカップに出場していなかったPIKAという19歳の右投手が合宿には参加。うまくいけば3月に日本に呼ぼうかと考えています。(球が速くなるドリル)の①しかやっていますが、ひょっとしたら140kmオーバーが期待できるかもしれない逸材。そんな2週間でした。

あと、ハラレにいたときにドリームパークを初めて見ました。無残な跡地でしたが、ハラレの方々の努力で再建設が始まったところでした。1997年12月に帰国した私には初めての球場(完成が1998年6月だと報告書にありましたから)。老朽化したダグアウトにはメモリアルプレートが寂しく張り付いていました・・・見ていると自分の名前もありました。まさか、自分の名前もあるとは感激でした。球場の再建設には、まだまだ資金が必要でしょうし、アフリカ予選の交通費・宿泊費などにもお金が必要。ブラワヨのハミルトン高校のグラウンドにも野球場を作っていると言われていたようですが、それにもお金が必要。テレビ東京の密着取材番組は2月に放送予定。それまでに、クラウドファンด์とかを準備して、視聴者に訴えかける(詳しくないので、わかりませんが・・・)、もしくは年末ジャンボ宝くじを当てるとかが必要かと思えます。

モーリスの家に大切に保管してあったブラワヨ隊員の報告書を読んでもと、当時の熱がビシビシ伝わってきた。もともと2008年大阪オリンピックへむけて、10か年計画をつくった1997年。さらに、10年経ちましたが、2020年には東京オリンピック。そこに、甲子園監督が挑戦する。私は、ピエロになり踊りますので、どうか皆さんの知恵と力を合わせて1mでも東京に近づきましょう！その挑戦こそが、ジンバブエ会やジンバブエ野球のことだけでなく、日本野球界の野球離れや、世界の野球を考え直すきっかけになると思えます。野球最進国の日本で野球の普及(高野連からのお達しがありました)という言葉が出てきました。みなさん、危機です。イングランドでサッカーの普及なんて言葉が出てくると思いませんか？私は20年以上前から言い続けてきました。野球は、間違いなく危機的状況です。

最終日の前々日の夜、疲れ切っていたのか9時半には寝ました。朝、5時過ぎに目が覚め、スマホを充電するために隣のリビングへ。テレビがないなあと思いつつ充電。(早く寝たから、隣でテレビを見て音がうるさいと悪いから別の部屋に移動したのかなあ・・・とっていました)

すると、「モーニング！」と奥さんのタビさんがリビングへ、すると“ぎゃー、テレビが盗まれている！ドロボーだー！”と絶叫！指さす方向を見ると、窓の鉄格子がひん曲げられて、窓が開いていました。頭は真っ白、泥棒？隣で扉を半開きで寝ていた私たち親子の隣で・・・ひょっとすると、寝ていた部屋にも入ってきて・・・！？確認すると、財布もパスポートも無事、バカ息子のイビキだけが部屋で聞こえます。テレビ・娘のパソコン、モーリスのスマホと現金などが盗まれたとか。初日に、私たちが来る、2日前に、獐猛な番犬が行方不明になったと言っていました。おそらく、まずは番犬を殺すか、連れ去り、そして泥棒。計画的な犯行だろうとモーリスは言っていました。

合宿最終日に、選手に「なぜジンバブエに、再び来たかわかる？それは20年前、標準以下の何もできずに怒ってばかりだったコーチが、日本に帰ったら甲子園に行けたり、プロ野球選手を育てられるようになった。つまり、ジンバブエに成長させてもらったということ。その分できる応援は、これからもする！」と言いました。

最終日の夜は、危険だったのでシェパード(人間のほう)が、泊まりに来てくれました。慌てて買ったお土産を詰めるバックがなかったので、また、あの青紫のバックに詰め込んで帰国。バックはまたしてもジンバブエから日本へ戻っていった。

## 7回の表

2017年度1次隊 ジンバブエ 野球隊員 谷山直規

2017年度1次隊ジンバブエで野球隊員として活動しています谷山です。

むらさき色のジャカランダの花びらも散り、雨季へと季節が変わろうとしています。

さて、ジンバブエに赴任して1年6ヶ月が経ちました。街を歩くとたくさんの人が声をかけてくれて、声をかけたら笑顔で挨拶を返してくれて、力強く握手してくれて、そこにはたくさんの笑顔があふれていて、1人も下を向いている人はいなくて現地の方々のこの上ない優しさ、クシャッとなる笑顔に包まれながら毎日楽しく生活することができています。

活動は、ブラワヨを拠点としてたくさんの子供たちと野球を楽しむことができています。

小学校の活動では、ペットボトルでティースタンドを作り、比較的簡単なルールからはじめ、徐々に徐々に野球のルールに近づけています。最初は打ってベースへ走らないことやダイヤモンド2周目を走り出す子どもたちも中にはいましたが教えていく中でルールを理解し、そしてレベルが上がるにつれて楽しさも上がりようやく野球のルールで行うことができるようになりました。次のタームで各学校対抗戦を行いたいと思います。

高校での活動では、打つ、守る、走るといった野球の技術的なことを教え、近くの高校同士で試合を行っています。土曜日にはブラワヨの大人たちに混ざって練習・試合を行なっています。選手の中には日本、メジャーリーグでプレーしたいという選手もいます。そんな選手がもっと増えていくようにさらに多くの子供たちに指導していきたいと思います。

さて、平日は小学校、高校へ行き活動を行なっているわけですが、街の外であるハイデンシティの学校に行くと英語を話せない子供たちがほとんどです。私も現地語であるンデベレ語を使って必死に伝えたいことを伝えますが伝わらないことも多々あります。私がもっと話せればなんて思うこともあります。そう思っています。そう思って指導を行っています。いきなり知らないアジア人が来て、知らない野球をやる。しかし、時間とともに肌の色、言葉を超えていきます。スポーツってやっぱりいいなと思う瞬間がそこにはあって、日本では感じることでできなかった喜びを感じることができています。野球を通して言葉では言い表すことのできない喜び、楽しさ、時には苦しみを子供たちと分かち合っていければと思います。

昨年12月にドリームカップが行われました。2020年東京オリンピック予選に向けての代表選手の選出も行われました。代表選手として選ばれずに涙を流す者もいました。このような姿はここにきて初めて目にしました。それだけ熱く野球に取り組んでいたからこそ悔しくて涙を流していたのだと思います。代表選手に選ばれた者は彼らの分まで本気でやって欲しいと思います。

大会を行うことができているのもジンバブエ野球隊の皆さまの多大なる支援のおかげだと思います。皆さまの思いを選手たちに届けるのが僕の役目でもあります。おかげさまの気持ちを忘れずに思いっきり野球と向き合い、本気で戦っていききたいと思います。

最後になりましたが、先日、首都ハラレにあるハラレドリームパークへ行ってきました。サッカー場を越えた先には、ベンチ、バックネット、まさに球場がありました。そこで野球をしていたと思うとすごくワクワクした気持ちになりました。野球は球場でしたい、そんな気持ちにもなりました。今は使うことのできない状態でしたがまた球場で野球を行えるように、私が今できるジンバブエに野球を普及させ少しでも人気のスポーツにすることに専心していければと思います。ジンバブエにはたくさんの先輩隊員が築きあげた野球があります。ここで野球を教えられることを誇りに思います。先輩隊員が築きあげてきたものを大切に、さらに発展させていきたいと思います。

## タンザニアに来て 1 年半

JICA シニア海外協力隊（野球隊員）岩崎広貴

タンザニアに来て 1 年半以上たちました。この頃、よく思うのは運命とか縁の不思議さです。特にタンザニア各地を訪れて僕だけが日本人の中で、でもユニホームを着て、タンザニア人達と野球をやっている自分自身が不思議に感じます。何か、今がある為に、その為に野球という一本の糸でずーっと繋がってきているのかなと思うことがしばしばです。野球を通しての人との出会い、心の葛藤、でも、なんとも言い表せないしあわせ感、充実感、しかしこれも、またなんとも言い表せない孤独感、68歳になった今でも迷いのある思い。人生って本当に不思議だなあって思うんですよ。

さて、現在のタンザニア生活について報告します。

スワヒリ語も日常会話程度ならしゃべれるようになり、普通に生活するには不自由を感じなくなりましたが、突っ込んだ会話が出来ない為、もどかしいことも多々あります。

ただ、それでもタンザニアの人達や選手達が ヒロキ、ヒロキとかコーチ、コーチとか呼んでくれて慕ってくれているのがうれしいです。

やはり、人との触れ合いは言葉も大切なのですが、それ以上にお互いの、心と心の繋がりが大切だと思えます。これは、肌の色の違いとか国・宗教の違いとか関係なく全世界の人達に共通して言えることだと感じます。

写真(本誌 P17 参照)は第 6 回タンザニア甲子園です。グラウンドも完成し、20 チーム程参加し(女子ソフトボール 5 チーム含む)ほぼ、去年の倍近くの参加となりました。特に女子の選手が激増しました。

旅費の都合で参加出来なかったチームを含むと去年の 3 倍近くのチーム数・選手数の増加です。(これは、14 歳から 17 歳の男女選手数で 13 歳以下を含めると相当数になります)

タンザニア各地を巡回指導。普及活動したかいがあったなと実感しました。

技術レベルも上昇し、優勝したアザニア Secondary School のチームなら日本の高校野球の地方大会においてでも十分通用するレベルにまで成長しました。

また、この度 6 か月の任期延長も認められ今年の 9 月末まで活動が出来ることになり、順調のように思えるのですが、肝心のナショナルチームメンバーの全体練習が出来ないのがネックとなっています。(16・7 歳の選手ばかりで、全国の Secondary School の生徒なので 1 か所に集まって全体練習が出来ない状態。現状は各地区の選手に個別の練習法を伝えるのみ)

4 月の初旬から東京オリンピック予選が始まるので(当初は 7 月初旬の予定)あと、たった 3 か月の準備期間しかなく、おそらく全体練習の出来ないまま戦わねばならないのが現状です。

東アフリカ地区 1 位が Final 予選に出場出来るのですが、4 か国のうち、ウガンダという社会人野球チームを擁する国に勝たねばならないという厳しい状態です。

何とか 1 位になって南アフリカでジンバブエチームと戦いたいのですが・・・？

ただ、オールアフリカンの立場で考えるなら、アフリカ 1 位チームがヨーロッパ 1 位チームに勝って、ぜひとも東京オリンピックに出場して欲しいですねえ。

とにかく、この年齢になって、まだチャレンジ出来る機会を与えてくださった JICA とタンザニア野球関係者の人達には感謝一杯です。その為にも、残り 10 か月精一杯頑張ります。

## アフリカを想う ～その貳～

村井洋介

最近日々の生活に追われる中で、伊藤さんや正岡先生、岩崎さん、堤くんのアフリカ関連のお話やアフリカ行きのお話を聞く度、自分からはアフリカが遠のいている事を実感する。帰国してあっという間に5年が経ち、ジンバブエに13年、南アフリカに5年の計18年に及ぶアフリカ生活が夢だったような気がしてしまう。

出張を含めると多くのアフリカの国々を訪問させてもらった。

ジンバブエに始まり南アフリカ、ザンビア、ボツワナ、モザンビーク、ナミビア、スワジランド、マダガスカル、モーリシャス、ケニア、タンザニア、ウガンダ、ルワンダ、エチオピア、アンゴラ、コンゴ民主共和国、ナイジェリア、ガーナ、コートジボワール、ブルキナファソ、シエラレオネ、モーリタニア、モロッコ、チュニジア、一度だけの訪問の国、複数回訪問の国合わせて24カ国、アフリカ大陸の半分の国々を訪問できたことになる。

アフリカ生活が10年を超えた辺りから、アフリカのどの国を訪問しても現地の人々には言わなくても私は既にアフリカ生活に慣れてしているとわかってもらえている扱いを受けていると感じるようになった。

それはちょっとしたことで、街の歩き方や道路の渡り方、モノの選び方、買い方や値切り方といったものがいわゆる旅行者とは少し違っていたのだと思う。だから生活用品のお店や飲み屋では会話が弾んだし、お土産屋さんでは疎まれた感があった。

また多く国々を訪問してアフリカには同じような言い伝えや慣習が多く見られた。その代表的なものを幾つか挙げてみる。

まずは「アフリカの水」について、だいたいどの国に行っても現地の人にアフリカの水を飲むと、もう一度アフリカに戻ってくると言われる。私の最初のアフリカ訪問は観光でケニアを訪れた1991年、翌年の1992年にアフリカに戻っている。そこで18年分の水をがぶ飲みした覚えはないが…

そして「考えておく」、たのみごとやお願いに対する回答で、相手を傷つけない回答ではあるが、その「考えておく」には基本的に期限は含まれていない。よって回答は明日でも10年後でも構わないのである。

最後に「小人伝説」、南部アフリカでは「トコロシ」と呼ばれている。其々地域によって色々な呼び方があるが、これは呪術も深く関わっていて、ほとんどの人が信じている。特に何か悪い事が起きるとこの小人が関わっていると考えられており、裁判の証言にも取り上げられることもある。私も様々なトコロシの話聞いたが、詳しくはまたの機会に…

嗚呼、アフリカが懐かしい…アフリカ四方山話でした。

---

2018年6月1日～2018年12月31日にご入金頂いた下記皆様に感謝します。(敬称略)

青木尚龍 網野勝史・裕美子 吾妻 智 飯尾明郎 以倉 章 井上久雄 石森四郎 池田周弘 伊藤益朗・和子  
伊東 敬 伊東英治 伊藤卓朗 今岡伸宇 印藤勝弘 上田博司 右柳好博 岡本征夫 岡田義昭 岡田昌尚  
岡崎誠吾・朝絵 奥田貞美 尾崎八郎 小澤 託 金丸明美 軽澤政美 片岡成夫 川上貴司 柄谷 桂 加茂周治  
景山高好 切貫可一 金 守良 黒川彰夫 楠 活也 五島 浩 近藤高志 小山誠一 金光道晴 阪本悦治  
坂本一夫 坂本義徳 澤田玲子 芝川又美 妹尾佳士 高橋恭三 辰己秀盛 竹下千あき 田邊雅通 田村正志  
田居秀雄 高江美香 丹 龍太郎 蔦 嘉一郎 堤 尚彦 津田健史 東矢高明 時政英之 中田恭二 中野 明  
難波 緑 成川昭治・正子 永田和恵 西口 勲 西村 勇 沼野耕三郎 野下美佳 鉢呂哲也 平山仁規 廣岡義之  
広岡正信 藤野 真 藤下美穂子 古川 明 前島信平 前田京子 前島宗甫 水島 洋 水江久代 三瀬和義  
三田喜英 宮田典計 村上英樹 毛利泰子 森 要 八木一真 山田恒治 山田信雄 山田静夫 山下雅之 山西清高  
矢野 亮 吉木直也 吉田貞比古 和田有二 和田勝行 渡辺 博 ZY会有志 夏の集い黒字分

## 若い世代の方への期待—グローバル化—(海外生活から得たもの)

右柳好博

関西学院大学硬式野球部先輩の伊藤益朗さんから寄稿のご依頼を受け、今回、ニュースレター「ジンバブエの風」に寄稿させていただきました。ニュースレター「ジンバブエの風」の趣旨に沿っていないかもしれませんが、最後までお読みいただければ幸いです。サブタイトル「グローバル化」なる言葉は既に使い古された言葉となりつつありますが、今でも日本も海外との繋がりが日々深化・変化しています。テーマとして今更かも知れませんが、これからの日本を支えていく若い方々と触れ合われる機会の多い皆様のご参考になればとの思いです。1974年に関学大を卒業後、総合商社で3年間、また転職したエンジニアリング会社では昨年6月に退職するまで41年間勤務しましたが、結果的に常に海外と繋がっていました。トータルで15年間以上の海外駐在や頻繁な海外出張ばかりであったサラリーマン人生を振り返りながら、色々感じたこと、楽しかったこと、辛かったこと等々、日本経済新聞の『私の履歴書』的になりますが私の拙い経験を基に書かせていただきました。

### ジンバブエ野球会との繋がり

ジンバブエ野球会との関わりは25年近く前になります。当時、伊藤先輩や村井様がジンバブエでの球場建設を進めておられた時に、私が駐在していたシンガポールに伊藤先輩始め皆さんが同国訪問の途中に立寄られました。今でも昨日のように思い出されます。当時は、「何でアフリカで野球？、それもジンバブエで？」と思ったことも。(つい最近のことはすぐに忘れますが、古い昔のことはしっかりと覚えています。)それ以来、ジンバブエでの野球の普及にご尽力されておられる村井様や伊藤先輩他、大勢の方々による活動に心を動かされていました。と言っても、私自身はサラリーマンとして世界を飛び回っていたことから、何かお手伝いをしたい、「ジンバブエの集い」に参加したいとの思いはあったものの、皆様の活動を横目にニュースレターを拝読させていただいているだけでした。2000年になってからですが、アフリカ地域を担当していた時に在日ジンバブエ大使とお会いする機会がありました。伊藤先輩の話を持ち出したところ、伊藤先輩のことは良くご存知で大変感謝されておられました。昨年6月末に退職したこともあり、昨年夏に初めて「ジンバブエの集い」に出席させていただいた次第です。懐かしい関学大野球部の先輩やニュースレターでしか存じ上げなかった村井さんにお会いさせていただきました。

### 海外との関わり

1974年に関学大学を卒業後商社に入社し、その後1977年にエンジニアリング会社に転職しました。当時、アルジェリアで大きなガス処理プラントを建設していました。このガス処理プラントは世界有数の規模のプロジェクトで、建設現場はアルジェリアの首都のアルジェから約600Km南に位置しており、サハラ砂漠の入り口と言われていたところ。ピーク時には約2,000名の日本人を始めとする外国人スタッフの他、アルジェリア人は総勢約10,000名が建設に携わっていたと記憶しています。私自身も1978年から1980年までその現場に駐在していました。家族とのやり取りは手紙だけで、家族にとっては本当に心細い期間であったと思います。砂漠特有の猛毒の角蛇やサソリがいました。アルジェリアに赴任する前にフランス語を勉強してから赴任しましたが、赴任当初はなかなか通じず苦勞しました。

1981年から1983年にかけてインドネシアのカリマンタン(ボルネオ島)の建設現場に駐在しました。現場はジャングルを切り開いたところでした。砂漠のアルジェリアの建設現場とは全く異なる自然環境で、ジャングルの中の川下りや水上スキーをしたり、「蛍の木」の発見、ワニ、オオトカゲやサル、また世界最大のセミであるセイオウゼミ等々と遭遇するという貴

重なる自然体験をしました。これらの駐在経験から、今でもフランス語とインドネシア語はまだ覚えています。

次は、前にも触れましたが 1992 年から 1999 年までのシンガポール駐在です。この駐在はシンガポール事務所勤務でもあり、家族を帯同しました。ここにも懐かしい思い出が一杯詰まっています。その一方で、当時も第二次世界大戦時代のシンガポールへの日本軍侵攻のドラマがテレビで放映されることがあり、シンガポールの方々(特にご年配の方々)への配慮が必要と思ったのを覚えています。各々の国の固有の歴史的背景を理解し、お互いが真摯な気持ちを持つことで初めて素晴らしい関係を培うことができると思っています。長男は高校 2 年生、長女は中学 2 年生での海外生活の開始でした。当初は本当に辛かったはずですが、そのうちに異国での生活や学校にも慣れて嫌がらず過ごしてくれました。この 7 年間は、「家族の絆」の重み・大切さを実感できた私の人生にとって本当に貴重な時間でした。また、今でも当時の事務所スタッフと家族付き合いをさせてもらっています。

サラリーマン生活の最後として、2012 年から 2016 年の 4 年間、ベトナムの首都ハノイに駐在しました。ベトナムには 1990 年頃によく日本から出張していました。当時のベトナムはまだしっかりしたホテルもレストランもありませんでした。また、今ではベトナム人も日本人以上に英語を話せる方が多くなりましたが、その当時は英語を話せる人は少なく会議もすべて通訳付きでした。当然、会議の時間が倍掛かりました。今でもその傾向がありますが、社会主義国家であることから会議にはずらりと大勢の方が出席してきます。官僚的な国柄でビジネスは非常にタフです。また、外国からの侵略を繰り返し受けたことから、国民性にもそれが影響を及ぼしているように感じました。その国の長い歴史の上に立った政治体制の影響でしょう。ただ、ベトナムの国民の平均年齢は約 30 歳で、非常にエネルギッシュです。また、日本に対するベトナム人の国民感情がいいのがありがたいです。

出張でも多くの国々を訪問しました。イランにも頻繁に出張しました。一人一人のイラン人は本当に優しいのですが、ビジネスとなると大変でストレスが溜まる国です。最近、米国がイラン核合意からの離脱表明をしたことで、大きく進展していた核問題ですがこの先どうなるのか予断を許しません。国と国との協議の難しさを物語っています。また、発展途上国では経済的に厳しい生活を送っている方を見る一方で、途轍もなく裕福な方が暮らしていることも確かです。2000 年頃にリビアにも交渉で何度も行きました。まだカダフィ大佐がリーダーとして国を指導していた時代で、これまで経験したことのないような異質の国でした。(このリビアの建設現場も場所的に大変なところでした。アルジェリアのイナメナスという場所の建設現場で 2013 年 1 月に悲惨なテロ事件があり多くの先輩や友人を失いましたが、リビアの建設現場はアルジェリアとの国境を挟んだリビア側の土漠にありました。)東南アジア地域と中東地域での商習慣・生活習慣の違いだけでなく、それぞれの地域、宗教や国ごとの難しい複雑な社会模様をひしひしと感じていました。

若い世代の方への期待——グローバル化——

グローバル化という言葉の定義も色々あるようです。一般的には、これまで存在した国家、地域などタテ割りの境界を超え、地球が 1 つの単位になる変動の趨勢(すうせい)や過程のように言われています。このような中で、私のような人生の後半を迎えているような人間がやるべきことは、これから日本を支えていく若い方々に人生のアドバイスをしてあげることではないかと思っています。個人的な偏見と独断で言うと、「しっかりした目標を持って、世界を相手に大きく成長して行って欲しい、そのようなグローバル人材に成長していただきたい。」というのが常日頃考えているメッセージです。そして、グローバル人材として活躍していくためには、次のようなことを大切にすべきではないかと考えています。

・日本人としての Identity を失わず、一方で相手の国々の方の Identity・考え方・やり

- 方を理解・尊重しつつ物事を纏めていく
- ・その国・その国の人々に貢献できる喜び
- ・そして多くの国々の方と知り合い、その人たちの暖かさを感じる
- ・事故危機管理能力を高める
- ・英語にプラスしてもう一か国語を是非習得
- ・家族の絆を大切に

このニュースレターをお読みになられた方が若い方々とのコミュニケーションの中で、何かのヒントになればと思う次第です。世界が Boarder-less の時代 ⇒ 遠くの地で起こったことが日本に影響し、日本で起こったことが世界中をかけめぐり色々な国際問題や紛争が絶え間なく起こっている時代です。そのような中で、家族も含めて海外で大病、テロ、交通事故や飛行機事故等に巻き込まれなかったのは本当にラッキーでした。また、私自身日本人であることでプラスになることはあっても、マイナスになった経験はなく、これまでお会いした世界各国の方々の温かさを日々懐かしく思い出している毎日です。

---

## 日系人のスポーツからブラジルの国民スポーツに

日系社会青年ボランティア ブラジル 野球ボランティア 高江直哉

ブラジルのサルバドール市にて野球指導をしております、日系社会青年ボランティアの高江直哉と申します。任地に派遣されてから早くも 10 ヶ月が経ちました。大きな目標としては私のいるバイア州での野球の普及、目前の目標としては指導しているチームが大会で結果を残すことを据えて日々を過ごしています。バイア州は日系の文化が薄く、特に野球に関しては全く普及していません。州都であるサルバドール市内でも野球の話をする、「サルバドールで野球をやっている人がいるなんて知らなかった」という反応をする人がほとんどです。日系人の人数でいうと、ブラジル国内で 3 番目に多いのがバイア州なのですが、野球は日系人の間のみで行われていたようで非日系の人々にまで広まることはなく、また州内の日系社会の衰退とともに野球も消えつつあるのが現状です。そんな状況を変え、野球というスポーツが日系と非日系社会を繋ぐ架け橋となるよう、また世代がどんどん下っていく日系社会のモデルとなるよう私ができる限りコーディネートできればと思っています。

この 10 ヶ月、バイア州で唯一の野球グラウンド、DCT SHIMIZU で日々子どもたち、大人たちと白球を追いかけてきましたが、早いものでシーズンも終わり、年末年始の夏休みに入りました。私の活動の中心である、非日系の貧しい子どもたちを中心としたチームのメンバーにとって 2018 年は忘れられない年になったのではないかと思います。12 月に行われた全伯大会初心者の部がこのチームにとって初めての大会であり、そこで優勝を収めることができました。私が任地に着いたころはまだ野球歴半年だった彼らが日を重ねるごとに野球の楽しさに気づき、選手としても人間的にも成長していくのを肌で感じるようになりました。日系社会、ブラジル社会、日本の「融和・融合」を掲げ、このチームがその象徴となって欲しいという願いを込めて、「UNIONS」とチーム名を変えて臨んだこの大会は私や首脳陣にとっても子どもたちにとっても並々ならぬ思いがありました。子どもたちの成長は著しく、大人チームと練習試合を行っても引けを取らないようにまで実力をつけてくれました。この大会は、初心者の部とは言っても、初めて参加したチームは初心者の部から始まるため、それなりの実力を備えたチームも参加していました。恥ずかしながら、私自身が当日の優勝候補筆頭のチームのプレイを見て、「これは厳しいかもしれない」と思っていました。初戦は子

どもたちからかなり緊張している様子がひしひしと感じられましたが、2 試合目以降徐々に緊張も解け、初陣の彼らにとって「恐れを知らない」ところが功を奏したようにも思います。決勝は予定通り優勝候補の筆頭との対戦となりました。序盤に 2 点を先制したものの、最終回到同点に追いつかれ、延長タイブレークの末サヨナラ勝ちという劇的な展開となりました。私は優勝したこと以上に子どもたちが涙を流していたこと、ともにチームを育ててきた首脳陣の方々や応援に駆けつけてくれた人までもが泣いて喜んでくれたことがうれしく、スポーツが与える感動や教育をこの大会で再確認できました。

大会が終わってから子どもたちのモチベーションも高まり、もっと練習をしたいと言い出すほどになっています。しかし、その一方でこのチームは依然として大きな問題を抱えています。その最たるものが資金繰りです。今回の大会の子どもたちの遠征費は 8 月に行われた日本祭りの売り上げから捻出しましたが、1 大会の遠征分のため決して十分とは言えず、活動費はほとんど野球場所有者であり、私とともに指導を行っているシミズさんの個人負担となっています。このまま自転車操業を続けるのは不安があり、シミズさんの負担を減らすためにも安定した資金繰りが急務であると考えています。残念ながら未だスポンサー契約や資金集めには至っておらず、更なる対策を今後講じていかなければなりません。もう一つの問題は数年後のメンバー及び日系の子どもの確保が求められていることです。未だに小学生の年齢のチームは結成にまで至っておらず、人数がそろっていません。そのため、数年後今のチームに新しい選手が十分に入っていない可能性があります。毎週日曜日に日系のこどもを中心としたメンバーの練習があるのですが、そこに球場周辺に住む非日系の子どもたちがなかなか参加できません。というのも彼らは家計を助けなければならず、日曜日に市場に行って親の手伝いをするということがよくあるのです。そんなこともあり、日曜日に人数が集まらず、チーム結成や充実した練習の実現には至っていません。日系の子どもたちも数えるほどしかおらず、10 年後、20 年後にここサルバドールの野球コミュニティを指揮するリーダーを育成するためにも日系の子どもの野球人口を増やすことにもっと努めなければなりません。

10 月から週 1 回ボランティア団体と連携して放課後に野球場付近の小学生をグラウンドで預かり、野球を教えて夕食を提供するというプロジェクトがスタートしました。子どもたちに野球を知ってもらい良い機会になっており、また優勝チームのメンバーには指導する側にこの日は回ってもらっています。こうして野球コミュニティが大きくなっていくことを願いつつ、新たな別のプロジェクトも 2019 年からスタートさせ、野球文化をこの地で芽生えさせるためにあと 1 年奮闘して参ります。

---

## Zimbabwe Baseball Interprovincial Tournament Report at Kadoma

1&2 September 2018

ZBA (IPT 2018 Tournament) Director アメリコ・ジユマ

インタープロビシヤル（地域対抗）2018 年大会は、9 月 1 日～2 日にかけてマシヨナランドのカドマにあるジョンケネディ小学校にて開催された。9 月 1 日午前 9 時、全チームの監督、審判、スコアラーが出席する中、技術ミーティングが始まり、大会規則が討議された。今大会に参加したのは、ハラレ、ブラワヨ、マシヨナランド・ウエスト、ミッドランドの 4 チーム。ホスト議長（委員長）の Prince Mukuzungu 氏から歓迎の言葉を受け、その後大会委員長より開会宣言があった。モーリス・バンダ ZBA 会長は家の用事で 2 日に合流する、マシゴとムタレチームは移動費用の問題で今回は不参加となったことが報告された。

1 1時に試合開始、2時間の時間制限または7回までのルールで試合が行われた。最大4試合、少なくとも3試合は各チームが戦えるよう、リーグ戦（総当たり制）を行った。初日の試合開始が遅れたため、2日目に時間切れとなり3、4位決定戦は行わなかった。結果、最終戦において拮抗した試合展開で昨年チャンピオンのハラレを12対11で破ったブラワヨが2018年の勝者となった。3位はミッドランド、4位がマシヨナランド・ウエスト。

MVPにはブラワヨのシェパード・シバンダ選手、打撃部門最優秀選手には4試合で6ホームランを打ち7打点を挙げたハラレのターニャ選手が選ばれた。審判部門では Clement Ndlovu が新人賞、Mathew Banda が試合中自信あふれるぶれない判定をし、最も技術力を高めた審判として表彰された。今大会でのパフォーマンスを基に、オールスターチームが選出され、All-Star T シャツを授与された。その他に25名がナショナルチームメンバー候補として選ばれ、10月のキャンプに参加することになった。

### 感謝

今大会を開催するに当たり、楠活也氏とジンバブエ野球会とバート・ブラッチャーコーチに御礼申し上げます。ジンバブエ野球に対し長年、絶え間なく支援をいただき心から感謝の意を捧げます。谷山氏よりマシヨナランド・ウエストチームへのユニフォーム及び各賞賞品を、Barbra Mugugu 女史からは All-Star T シャツを寄付していただきました。これらの賞品は参加選手たちのモチベーションを高めました。皆様、本当にありがとうございます。出来得るなら、毎年このような賞をいただければと願っています。参加者全員に対し、交通費、2日間の食費、宿泊費を負担してくれた ZBA にも感謝します。さらにこの施設を使用させていただいた Sir John Kennedy primary school にも御礼申し上げます。暖かく迎えていただき、快適に過ごせました。今後とも良い関係を続けていけることを望んでいます。

大会初日から最後まで、全チームが良い雰囲気、力強くプレーし、負傷者も無く素晴らしい大会となった。競技レベルは徐々に改善しているが、小地区におけるコーチングスタッフ；試合に関する豊富な経験値を持つコーチを養成する必要がある。そして ZBA に頼ることなく、すべての地域において自分たちで移動費を捻出できるよう後押ししなければならない。将来的には全チームが大会前夜に到着し、大会スケジュールが予定通り進められるようになればいいと考える。

### <大会成績>

#### [予選リーグ戦]

Bulawayo	12	5	Mashonaland West
Harare	11	7	Mashonaland West
Harare	6	11	Bulawayo
Harare	9	5	Midlands
Bulawayo	14	3	Midlands
Midlands	12	8	Mashonaland West

#### [決勝戦]

Harare	11	12	Bulawayo
--------	----	----	----------

## Zimbabwe Baseball Association 2018 Dream Cup Championship

Lord Mervin High School, Harare

08 and 09 December 2018

ジンバブエ野球協会会長 モーリス・バンダ

2018年12月8日、9日にハラレのロード・マービン高校にてドリームカップが開催された。ブラワヨ A,B、ミッドランド、マシヨナランド西、マスビンゴ、ハラレ A,B の計7チームが参加した。マニカランドは不参加。

4人のスコアラー、7人のアンパイヤーが全試合を取り仕切った。2球場を利用し、試合は10時開始、勝ち抜き戦形式で予選を実施、8日中に決勝へ進むチームが決まった。おかやま山陽高校野球部監督 堤尚彦氏を迎え、本大会が開催できたことは大きな喜びだった。氏は1996年ブラワヨで野球指導をし、2019年4月南アで開催されるオリンピック・アフリカ予選の（ジンバブエ）ナショナルチーム監督として戻って来る。

### <試合と結果>

12月8日に予選トーナメント、9日には勝ち残った4チームによる決勝リーグ戦をする予定も、9日は第1試合途中で降り始めた大雨のせいで、2試合のみの実施となった。数時間、雨が降り続いたため、残りの試合は中止となり、大会は公式に終了された。

閉会式で堤氏は、12月12日～18日ブラワヨで開催されるキャンプに参加する25名の選手名を発表した。それに続き、さらに練習を重ね、野球の技術と試合水準を高めるよう全選手たちを激励した。

### <困難な問題>

現在ジンバブエを覆っている経済状況は、野球活動に向けてのチームの準備に影響を与えており、計画していた野球活動が制限を受けている。さらにZBAの活動を支えるべき中枢メンバー内に組織内の政治的理由で不協和音が生じてもいる。

---

## 事務局だより

伊藤益朗

皆様いつもジンバブエ野球会にご理解とご協力を頂きありがとうございます。

●<ホームページを昨年一新しています> 新アドレスは <https://zykai2018.jimdo.com/>です。是非ご覧下さい。また前回のジンバブエの風40号から、印刷代を抑えるため試験的に、カラー写真ページを印刷せず、上記ホームページ内の41号でご覧頂くことにしています。お知り合いにもご紹介の程、よろしくお願い致します。

●1 ページ目に「東京オリンピック予選等支援・特別募金のお願い」の記事を掲載しました。

●ジンバブエの状況：最近のモーリス氏からのメールによると、ガソリンがさらに入手困難に、それからスーパーの商品が底をつき始めた、ということでした。谷山野球隊員曰く、それでも国民はへこたれていない、そこがジンバブエの良いところ、とのコメントでした。

●ジンバブエチームの東京オリンピック予選に向けた強化策への協力として、おかやま山陽高校野球部はジンバブエから昨年(2018年)8月4日來日から27日離日まで、選手3名と野球協会会長のモーリス・バンダ氏を招き、練習参加させて下さいました。同校野球部の堤監督は、20年以上前に、青年海外協力隊野球隊員としてジンバブエで指導されていました。

そして12月に約2週間、堤尚彦監督はジンバブエでの大会視察と、その後の代表チーム合宿に参加、指導され、本年4月予定の同オリンピック予選にはベンチ入りを予定されています。

また、本年3月にも、昨夏同様に2選手を招き練習参加させて下さる予定です。これらを現

役の高校野球監督が実行するのは、勇気と決断があってこそその画期的なことです。乞うご期待。（これらはジンバブエ野球会の事業ではありません）

● 昨年 8 月 4 日にモーリス会長と一緒に来日した選手は、次の 3 名です。

ナタニエル(投手) 23 歳。ターニャ(投手と外野手) 27 歳。タピワ(捕手) 21 歳。

8 月 4 日と 5 日は尼崎市の正岡さん宅泊で、

5 日は尼崎双星高校で開催された、尼崎サマーセミナーに正岡茂明さんが開講された講座「ジンバブエ野球会」に顔出しした後、甲子園で慶応 VS 中越戦を観戦。

6 日は正岡康子さんが随行し、JR 新快速で姫路まで行き、姫路城を見学後、新幹線も使って、おかやま山陽高校のある鴨方駅へ。

予定通り、17:01 に岡山県の鴨方駅に到着し、ホームから階段を上ると、改札口前になんとおかやま山陽高校野球部チーム全員が！

「感動の出迎えに、涙が出そうになりました。感謝。」と正岡さん。

その後は、2019 年のオリンピック予選に向けて、同校で練習や試合に参加させて頂きました。ジンバブエ野球会としては、側面支援として、関西滞在中のお世話を致しました。

● 上記 2 項、一連のおかやま山陽高校及び堤監督とジンバブエとの野球交流が、2 月 16 日 23 時のテレビ東京「スポーツウォッチャー」で、放送予定（変更の可能性あり）です。

● 野球の東京オリンピックアフリカ予選は 4 地区に分かれて 3 月から以下の通り行われます。 < 1 次予選 >（以下の 4 地区に分かれて）

#### ZONE WEST 1

4 チーム参加：ブルキナファソ・象牙海岸・ガーナ・トーゴ

2019 年 3 月 22-24 日（於：ガーナ）Labone Secondary School, Labone, GHANA

#### ZONE WEST 2

4 チーム参加：カメルーン・コンゴ民主共和国・ナイジェリア・チュニジア

2019 年 3 月 21-25 日（於：ナイジェリア）Isaac Boro Memorial Park, Port Harcourt, NIGERIA

#### ZONE EAST

4 チーム参加：ケニア・タンザニア・ウガンダ・ザンビア

2019 年 4 月 5-7 日（於：ケニア）Lanana School Nairobi, KENYA

#### ZONE SOUTH

5 チーム参加：ボツワナ・レソト・ナミビア・南アフリカ・ジンバブエ

2019 年 4 月 23-26 日（於：南ア）Boksburg Baseball Club, Johannesburg, SOUTH AFRICA

< 2 次予選 >（1 次予選 4 地区の各 1 位、計 4 チームが参加）

2019 年 5 月 1-5 日（於：南ア）Boksburg Baseball Club, Johannesburg, SOUTH AFRICA

< 東京オリンピック出場決定戦 >

アフリカ予選勝者とヨーロッパ予選勝者による出場決定戦の勝者が東京オリンピックへ。

● 前号でお知らせしましたタンザニア・ジンバブエツアーは、今回の冬の集いでお話し頂く右柳好博氏、他に江野村和哉氏、正岡さんご夫妻と私伊藤益朗の 5 人で行ってきました。タンザニアでは、サファリの雄大さと野生の動物群に感動し、代表監督の岩崎さんは多くの現地の人たちや JICA 職員、協力隊員ら日本人の皆さんの温かい協力を得て、野球を介した人のつながりを広めておられました。ジンバブエでは、モーリス会長、コーチの皆さん、シェパード選手らの数十年にわたる日本人とのつながりに、谷山野球隊員らの新しい力が加わり、野球の定着度に厚みを感じました。永年の皆さんのご理解とご支援が途絶えることなくポディブローのように良い意味でじわじわと効果をあげていると嬉しく感じました。

● 来る 2 月 24 日(日)の冬の集いでは、「海外生活での思い出」と題して、ツアー参加の右柳好博さんにお話しして頂き、続いて正岡さんに「昨年 10 月のタンザニア・ジンバブエ巡りと

その後のアフリカ(野球)最新情報」を紹介して頂きます。詳しくは最終面をご参照下さい。  
●前回「夏の集い」は、初代ジンバブエ野球隊員(1992~1994)でその後も永年ジンバブエに残りジンバブエに野球を根付かせるのに最大の貢献をされた、村井洋介さんに「1990年代・ジンバブエ野球創世記」と題して、お話をさせて頂きました。

ジンバブエでは1990年から1992年まではソフトボールをしていました。当時のジンバブエ野球ソフトボール協会会長のマルコム・バーンさんが、当時の日本チームの戦いぶりを見て、山本英一郎氏に指導者派遣を要請されたのを受けて、同氏がJICAに依頼され、青年海外協力隊員として野球指導者がジンバブエに派遣されました。(初代隊員が村井さんでした。)野球がオリンピック種目になったこともあり、男子は野球、女子はソフトボールに分かれました。選手は27~28歳位の白人ばかりで、野球はハラレのスポーツクラブでされていましたが、最初はひどい対応をされました。白人ばかりの選手たちに一目置かせるために、「私が投げます」と、投手として本気で立ち向かい、7回投げた19三振を取り、以後、ようやく受け入れてもらいました。しかし、南アに大敗する中で、白人より黒人に教えようとカウンターパートのマンディ氏(当時19歳)と共に彼の母校の高校から始めました。その後、次第に黒人居住区の小学校に行き紹介、先生方やナガセケンコーボール社などの協力を得て、広がっていきました。ジンバブエ、南ア、ザンビアの小学生国際大会も開きました。リクエストは70校と増えてきたのに、月から金の5日間でやっと5地区しか回れない。ということで、後任隊員を呼ぶことに。任期終了時には2代目野球隊員の小澤託さんが来ていました。当時会長のバーンさんは「野球隊員を10年は続けましょう」と言っておられました。

(伊藤の感想)村井さんの後、実にたくさんの野球隊員が続き、現地社会状況の影響でブランクはあったものの、東京オリンピック予選を本年4月に控える現在の活発な状況に繋がっています。村井さんの、任期中とその後の自ら継続された野球指導への熱意と行動力とお人柄がジンバブエの人たちと後任の野球隊員の方々を引き寄せ、現在のジンバブエ野球を導いているという、「歴史に対する一人の働きの大ささ」に感慨を覚えました。

●2018年6月1日から2018年12月31日までの主な支出は、以下の通りです。

(ZWへ送金)	ZW州対抗大会宿泊支援(楠活也氏よりの寄付分)	100,000円。
(ZWへ持参)	ZW代表合宿支援(堤氏がドル換金の上、ZWへ持参)	265,000円。
(国内分)	ジンバブエの風40号郵送料	22,502円。
	ジンバブエの風40号印刷代	35,640円。
	夏の集い支援(事前受領していた「集い特定」の寄付分)	13,000円。
	来日ZW選手関西滞在時の支援金	42,280円。

期首(2018年6月1日)残高は、268,416円。昨年末(2018年12月31日)残高は、309,276円。詳しくは、今期末の2019年5月末現在での決算報告として次号に掲載いたします。

●私が野球場を造りたいとぼんやり考え、専用ノートを作り動き始めたのは、24年前のことです。それまで色々と思いつくことはあっても、日常の平凡なこと以外で実現できたことなど一つもなかったと思っていましたが、村井さん他の皆さんとの協力で、実現したのです。現在私は、世界が自分中心主義に傾いているように感じ、又自分の力のなさに悲しい思いをすることがよくあります。しかし、こんな状態の私でも稀に、人のためにと行って行動したら、必ずと言っていいほど普段と違ったあの当時に似た勇気や力強さを自分に感じるのです。人間って不思議です。この世界も不思議です。この世には、自分の心の状態によって、親切の交流が当たり前の世界と、損得が前面に出た自己中心の世界が同時に存在しているのではないかと感じます。そして、あれから四半世紀。時が流れ、人も同じままではなくても、変化し、バトンタッチし、何らかの形で繋がっている現在です。そのことを再確認している今回の東京オリンピック予選や、堤氏のジンバブエ訪問のような気がしています。

## ジンバブエ野球会 冬の集い

### 「海外生活での思い出」

お話 右柳好博氏

関学大野球部で、伊藤の2学年下であったため大変ご苦勞をされた右柳さんは、見るからに温かいお人柄であることが伝わって来る方です。

海外勤務の経験豊富な右柳さんの目に映った世界とは？

「堅い話ではなく、色々な面白い体験をご紹介させていただきたいと思います。若い方々への期待のようなことに触れたいと考えております。」とのことでした。

また右柳さんのお話に続いて、10月にタンザニアとジンバブエに野球旅に行つて来られた正岡さんご夫妻に旅のお話と、最新ジンバブエ野球情報をお話し頂きます。

皆様お誘い合わせの上、是非おいでください。

**と き**：平成31年2月24日(日) 午後1時30分受付開始  
2時00分 右柳好博さん「海外生活での思い出」  
続いて 正岡さん「アフリカ旅と最新情報」  
4時30分 閉会

**ところ**：塚口さんさんタウン2番館(2F)住宅集會室

(管理事務所の隣、年金相談所の前20m)

管理事務所のTEL06-6429-5327

塚口さんさんタウン2番館は、阪急塚口駅南改札から約80m、駅前ロータリーを挟んで正面に見える14階建ビル。ビル東側にあるエレベーターか階段が便利です。

<注意> 2番館の2階ですが、もし1番館の2階から繋がっている回廊デッキから2番館ビルに入ると、そこは2番館の3階になりますので、1フロア降りて下さい。

地下駐車場(有料)は2番館東面から入って下さい。

**かいひ**：(お茶代・会場費等として) 500円

**準備の都合上(当日参加も歓迎ですが)、2月22日迄に下記へお申し込み頂けると助かります。**

事務局伊藤 〒661-0012 尼崎市南塚口町2-1-2-510 TEL06-6427-4950 [zykai@hkg.odn.ne.jp](mailto:zykai@hkg.odn.ne.jp)

#### 「ジンバブエ野球会」入会、継続のお願い

同会の目的：アフリカを中心に野球振興と野球交流をゆったり応援する。

活 動：①年会費及び寄付から必要経費を差し引いて、元ジンバブエ在住の村井洋介さんらの意見を参考にして、目的のために役立てる。

②参加者、その他に年1～2回、ニュースレターを送り、アフリカやジンバブエのようす、会計報告、その他催しなどを知らせる。

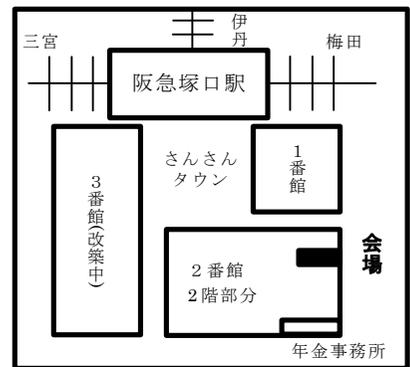
趣旨にご賛同頂ける方は別紙郵便振替用紙でのご送金にてお申し込みください。

郵便振替口座：00930-2-126157 ジンバブエ野球会

年会費：1口 3000円

事務局：661-0012 尼崎市南塚口町2-1-2-510 伊藤益朗 TEL06-6427-4950

<https://zykai2018.jimdo.com/> E-mail: [zykai@gmail.com](mailto:zykai@gmail.com) 又は [zykai@hkg.odn.ne.jp](mailto:zykai@hkg.odn.ne.jp)(従来通り)





日本で野球研修中のジンバブエ選手たち

ジンバブエに帰国直後の大会で



昨年 12 月のドリームカップと代表合宿、ジャカラランダの並木(右上)



堤氏と。(左)野球隊員の谷山氏、(右)元独立リーグ選手のシェパード氏。



今は使えない「ハラレドリームパーク」跡地。(左)1 塁側ダッグアウト内の記念プレート  
(中)バックネットと 1 塁側ダッグアウト、(右)再整地中とのことだが・・・



(上 3 点)ジンバブエ野球隊員の谷山さんと選手たち



(上 3 点) 岩崎広貴さん(ナショナルチーム監督)とタンザニア甲子園



ブラジルの高江直哉さん。バイア州の州都サルバドールで、日系社会、ブラジル社会、日本の「融和・融合」を掲げ、このチームがその象徴となって欲しいという願いを込めて、「UNIONS」とチーム名を変えて活動中。



2月24日の冬の集いでお話し頂く右柳好博氏  
(左)ロンドン・ノッティンゲルにて、(中)ロンドンにて、(右)タンザニア・カラトゥにて